

## アラボラ講座 2022年 シリーズ 24 第5話 レジメ

2022年11月27日

### 1. ド・レセップス(仏)のパナマ運河工事《1879年～1889年》

結論から先に言うと、建設の失敗の要因は地理的な設計条件がスエズ運河とは全く異なっているにも関わらずスエズ運河建設の知見と経験をド・レセップスがそのままパナマに当てはめる愚挙に出たため、工事が試行錯誤の繰り返しとなり時間と費用の増大化を招き会社が倒産し失敗に終わった。

### 2. アメリカ合衆国のパナマ運河工事《1904年～1914年》

①【遠因とアメリカの転回点】アメリカは領土拡大の伴い工業生産力がイギリスを抜き海外市場の開拓と東西両海岸間の迅速な流通を計る必要性に迫られていた。その当時、スペインの植民地キューバに資本投下していたがスペイン現地政府の圧政で独立運動が起こりそれに介入した。自国民保護のためキューバに派遣されたアメリカ海軍戦艦がキューバ港で爆沈したのがきっかけとなり対スペイン戦争に発展、アメリカの全面勝利に終る。その時、代わりに急派された最新の戦艦でさえキューバの戦場に到着するのに57日を要したことから“中米にアメリカの運河を”という国民世論が自然発生的に醸成された。

#### ②【英国との条約改正と建設ルートの争い】

運河を建設するには両国間条約（アメリカ・英国間:Hay/ Poncefort）の改正、及びパナマ自治州の宗主国コロンビア共和国(今のコロンビア)と新条約が必要になる。英国はアメリカが運河建設することに譲歩したが、コロンビアは新条約を拒否したため運河建設に暗雲が立ち込めた時、フランス人の土木技師（ビューノー・ヴァリヤ : ド・レセップスの主任土木技師）の仲介が功を奏しパナマがコロンビアから独立を計り結果的にアメリカは新パナマ共和国政府とパナマ運河条約を締結することが出来た。

#### ③【建設ルートと運河形式の争い】

アメリカ合衆国第26代大統領・セオドラ・ルーズベルトは主体的にパナマ運河建設工事にその政治的手腕をいかんなく発揮した。彼は周囲の助言者やアメリカ土木学会の土木技師らの具申に耳を傾け、難航する運河ルートの選定に積極的に参加し議事をリードしてニカラグアルートではなくパナマルートを選んだのである。また、決着のつかない運河形式の選定にも現場の意見に耳を傾け開門的に決断した。更に、工事を進めるに当たってはフランスの轍を踏むことがないように予算管理の徹底を指示した。アメリカが20世紀の覇権国家として踊り出ることが出来た大きな要因はパナマ運河建設を通じて海上覇権国家(シー・パワーの確保)への道を選んだルーズベルト大統領の政治的決断と力量に負うところが大きい。

講師 清水弘幸（青山とパナマ運河研究者）